大阪城
2024 12/12 (木) 14503 号
金港西成分会
ごんわ 6647-4947

今年も残すところ、20日を切った。気温も12度くらい4度とかの範囲で、少しづつ下ってきている。軍手やマフラーも欲しい時も出てくるだろう。ノドをやられるカゼ、インフルエンザ、コロナウイルスの変異株も根強く残っていて健康に充分気をつけて、のり越えて行く年末、新年になってきている。

臨時国会の政治は、あと10日ほどだが、安倍強権政治とは違ってきて、少数与党に変化して、国会や論議もかわってはきているのだろう。

13兆9000億円の補正予算は半分近くは国債でまかなうという。内身では、宇宙基金に3000億円、高速通信5G事業ノ北500億円、半導体事業に4700億円とか、民間会社にばら金はふくらんでいる。それも、成功し、実をむすび、成果をみんなにわけられれば、意義もあるが、そこらがいつもよくわからないシクミになっている。日本の社会や経済が安定して、正しく発展の道を進んでいる実感は、感じられない。年が明けても、物価は上り続けるといっている。日々の生活はより不安定できびしくなる。身を切る改革とか、カッコづけでごまかせた時は過ぎて、みんなこれ以上、身を切ったら死んでしまう病状に近くなってきている。天地や石も叫ぶようになるだろう。

核なき世界、共に　被団協、ノーベル賞授賞式

ノーベル平和賞を受賞した日本被団協の箕牧智之さん、田中重光さん、田中熙巳さん＝オスロで10日、猪飼健史撮影

被爆者の立場から核兵器廃絶を国内外に訴えてきた日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）へのノーベル平和賞授賞式が10日、ノルウェーのオスロ市庁舎で開かれた。日本被団協を代表して田中熙巳（てるみ）代表委員（92）が受賞演説し、「核抑止論ではなく、核兵器は一発たりとも持ってはいけない」と呼びかけた。ウクライナや中東での戦争を巡る国際情勢に触れ、「『核のタブー』が壊されようとしていることに限りない口惜しさと憤りを覚える」と警鐘を鳴らした。

毎日新聞 2024/12/11

世界各地で戦火が拡散拡大した２０２４年の年も残すところわずかになりました。この中で日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞しオスロでの授賞式に代表団が参加しました。戦争は一旦始まると歯止めなくエスカレーションの道をたどって最終的には「核兵器の誘惑」に引きずり込まれます。

３年近く続くウクライナ・ロシア戦争、ロシア軍６０万人ウクライナ軍４０万人の計１００万人の戦死者と言われています。それぞれの「戦争の大義」をおいて、誰かがとめないといけません。中身が未だわからないなりに世界がトランプに期待を寄せるのもそのためです。

日本は中途半端な「戦争支援」を考えるのでなく「平和に徹する」必要があるとおもいます。

もうすぐ始まる２０２５年は戦火がおさまる年でありたいものです。